

# 徳富蘇峰記念館

目録 — (23)

## ジャーナリストの書簡展

展示期間◇平成十八年一月六日〜十一月二十九日

今年の特別展は「ジャーナリストの書簡」です。新聞の創成期から戦後に渡って活躍したさまざまなジャーナリスト55名の書簡を展示しています。

昨年は第二次世界大戦終了後六十年を記念して、種々の催しが日本でも、世界的にも行なわれました。今回の目録の巻頭には、昭和20年終戦前後の徳富蘇峰、正力松太郎、馬場恒吾の書簡をとりあげ、緊迫した当時の状況を再現してみたいと思います。

東条の方針で新聞紙面が二頁とされた時の蘇峰の苦渋、一日たりとも無駄にできなかった事態に直面した正力の馬力、敗戦直後の状況を深く憂慮する馬場の言葉を平和な現在にかみしめてみたいと思います。

蘇峰は戦時中、物資欠乏のため新聞紙を削減しようとした東条英機(明治十七〜昭和二十三)に対して昭和十八年三月十六日、次のような書簡を送りました。

(前略)若シ朝夕ノ新聞ヲシテ少平タルニ頁帑ヲラシメンカ世間ノ所謂広告散ラシノ類ニ過キス。陸海勇士ノ奮闘ノ記事モ銃後老若男女ノ忠良報國ノ美談モ殆ンド総テ抹殺セザルヲ得サルベシ。矧ンヤ世界ノ視聽ヲ聳動スルカ如キ大論文ニ於テオヤ。(中略)新聞紙ノ利器タルハ軍国多事ノ今日尤モ然リトス。平時ニ於テハ尚忍ブ可シ今日ニ於テハ即今以下ニ紙幅ヲ減削スルハ百害アリテ一利ナシ。新聞紙ハ情報局ノ延長ニシテ又其ノ補充ナリ而シテ其ノ社会ノ各層ニ浸透シ内外ニ蔓延スルノ効力ハ到底何物モ之ニ追隨スル難シトナス。(中略)若シ今日新聞紙ノ軍國ノ御用ニ立ツコト小ナリトセハ是レ寧ロ指導者其人ヲ得サルノ罪ニシテ決シテ新聞紙其者ノ罪ニアラス。若シ当局ノ有司ニシテ之ヲ善用スルノ道ヲ解セハ其ノ効用ハ今日二倍シ乃至十倍スルモノアラン(後略)

蘇峰の新聞を守ろうとする熱意と、利器である新聞を使いこなせていない東条への忌憚のない意見、忠告です。

読売新聞社の正力松太郎(明治十八〜昭和四十四)は戦争が終わってすぐの昭和二十

年九月五日に京橋区築地本願寺から、次のような書簡を蘇峰に送っています。

先生、御親書有難う御座ります。時局ニ就きましては無念の二字の外申上ぐる言葉もありません。只だ今更ながら軍略と政治との一致せざりしこと、軍、官共々指導者ニ実力を欠きしことは残念であります。次ニ弊社も、八月十五日正午以来、御茶の水の地下工事を中止しました。目下読売別館(旧報知社屋)と本館の復旧ニ毎日百名余の鉄工、大工、人夫が働いております。本月十五日二別館ニ移転し、編輯局、業務局、工務局の事務を執ります。同社屋は幸ニ地下、及一階、二階が焼失せるも三階、四階、五階が無事でありましたので、地下室、一階、二階の復旧と共に三階以上の貸室の人々ニ明渡しを受け之を使用することと致したのであります。輪転機は十七台を焼失しましたが幸ニも一機懸命の努力にて本月末ニ少くも四台の高速度輪転機を読売本館の工場に於て運転開始の運びに至るかと思ひます。何卒御安心ください。(後略)

正力の蘇峰への報告は詳しい。新聞社が焼かれ、印刷機十七台を失い、残りの四台をもとに二十日間の社員の努力が大きな力を生んだ、その無念の言葉が終戦の日本にびつたり合う気持ちであったであろう。昭和二十年十二月十二日に正力は果鴨に収容された。

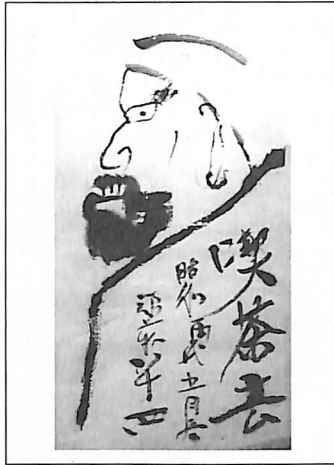
正力が果鴨に収監されている間、読売新聞を任されたのが馬場恒吾(明治八〜昭和三十一年)である。馬場の昭和二十年十一月七日付の書簡を紹介しよう。

(前略)又そのお手紙には先生が米軍により調べられるかの御懸念あるかの如く拝読され候が其後の様子をみれば、所謂戦争犯罪人とは戦時国際法規を破つた者を指すらしく、先生などに関係なしと存じ候。且言論人を問題にするなどは言論自由の趣旨に反するものとして充分抗弁の余地有るものと思われ候。それよりは今後の日本の運命に関して私共は非常に憂鬱の感に襲はれ居り候。昨今の模様にては日本は或は共產党の爲めに破壊されるにはあらずやとさへ思はれ候。食糧欠乏から絶望的になりたる国民を騙つてどんな事を仕出来かすか、それを警戒抑制すべき新聞が自ら下剋上の運動を起し、自暴自棄的の傾向を助長する観すら有之、小生すら心配に堪へざる形勢を馴致いたし居り候。今日ほど先生の御意見を何度思ひし事無之候。(後略)

終戦3ヵ月後の馬場の書簡である。蘇峰は、昭和二十年十一月から二十一年三月にかけて、戦犯に指名されることを想定して「法廷に立つ気持」の原稿をまとめた。タイプ用紙三十枚の長文であり、秋元俊吉と山県五十雄が英訳にかかわった。馬場は蘇峰の言論人としての重さをじかに感じていたのであろう。

終戦を境にして蘇峰をとりまく新聞人たちの声をじっくり聞いてみると、新聞の持つ役割の重さがより一層強く感じられた。

2006年3月 徳富蘇峰記念館学芸員 高野静子



蘇峰は昭和20年にA級戦犯容疑者に指名され、熱海の晩晴草堂に蟄居となり、多くの達磨画を描いた。

明治20年代後半の主要新聞の社主・主筆		
氏名(号) (蘇峰宛書簡数)	生没年・出身地	解 説
朝比奈 知泉 (号・礎堂) 50通	1862～1939 文久2～昭和14 茨城県	明治・大正期のジャーナリスト。末松謙澄の勧め、山県有朋の後援で明治21年『東京新報』を創刊主宰し政治評論を行う。『東京新報』廃刊後は『東京日日新聞』主筆となる。晩年は『やまと新聞』等に関係していた。陸羯南、徳富蘇峰と共に当時の三大記者といわれた。蘇峰、朝比奈知泉、森田思軒の主宰で開催された明治初の文学者の集まり「文学会」では幹事もつとめ、その会則を作った。 展示書簡:明治(21)年10月19日付 兼て新島先生へ御咄申上候かきもの、御出立之節までに差上候様致度、(中略)明日、何時之汽車に而御出被成候哉、たとへステーションにてなり共一度御面会致度(中略)殊に金森先生へは未だ拝顔を得ず候間、是非其機会を得たきものと存候。両先生へ御伝言被下度。
市島 謙吉 (号・春城) 2通	1860～1944 万延1～昭和19 新潟県	明治・大正・昭和期の著述家・学校経営者。大隈重信の下に改進黨に入り、明治27-35年衆議院議員。『高田新聞』を興し、『新潟新聞』『読売新聞』の主筆となる。東京専門学校の設立、早稲田大学の発展に尽力。早稲田の四尊のひとり(他の3人は高田早苗、坪内逍遙、天野為之)。大日本文明協会理事長、日本図書館協会会長の要職も歴任した。晩年は隨筆を多く著す。 展示書簡:大正7年5月25日付 「漢籍国字解」一冊を謹呈するので、先生の高評を賜りたい。(要約)
大岡 育造 (号・硯海) 2通	1856～1928 安政3～昭和3 山口県	明治・大正期の政治家。はじめ医師を志し、長崎医学校に入学。のちの司法省法学校などに学ぶ。明治23年『江戸新聞』を買収し『中央新聞』と改称し、その社長となる。同年帝国議會開設に際し、山口県選出の衆院議員となる。大正3年山本内閣の文相となるが、まもなく退官し政友会の長老として政界に重きを成した。 展示書簡:明治( )年11月26日付 島田三郎氏の書翰は次回刊行の貴誌紙上に掲載して欲しい(要約)
楠本 正隆 (号・西洲) 7通	1838～1902 天保9～明治35 長崎県	明治時代の政治家。大村藩の藩校の監察を務め、尊攘・倒幕運動の高まりの中で藩の中老として活躍。明治5年新潟県令となり、県会開設、地租改正事業推進等の改革に努め、名地方官といわれた。明治10年には東京府知事となり、市区改正等を行う。明治12年元老院議員、その後副議長。明治23年第1回総選挙で衆議院議員に当選。明治26年には星亨の後を継いで衆議院議長に就任。明治25年頃以来『都新聞』社主、社長としてその経営にも心を配った。 展示書簡:明治31年2月11日付 先日相願置候外交上二関スル材料の御意見書何卒御心配之上御惠贈被下度(後略)

<p>志賀 重昂 (号・翔川) 60通</p>	<p>1863～1927 文久3～昭和2 愛知県</p>	<p>大正・昭和期の地理学者。札幌農学校を卒業し、教員をへて、明治19年南洋諸島を旅して、翌年『南洋時事』を刊行。明治21年には三宅雪嶺らと政教社を立て、雑誌『日本人』を発行して国粹保存主義の論陣を張る。明治23年に末広鉄腸が主幹の新聞『国会』の客員となる。明治26年辞職。明治27年日本アルビニズムの先駆的著書『日本風景論』を刊行。日露戦争に従軍した。世界漫遊後『世界山水図説』『知られざる国々』を刊行。この間早大で地理学を講じる。</p> <p>展示書簡:明治29年2月6日付 謹啓此紹介状持参者は前年貴君と兩三回御面知致候者にて四五年前宇都宮平一氏の紹介にて小生と熟知し、以来「国会」に従事する事三年余、昨年小生紹介にて松江日報に主筆となりて出雲に赴き候仁にて、性質は小生数年來詳細に存居り保証仕候。(後略)</p>
<p>嶋田 三郎 (号・沼南) 19通</p>	<p>1852～1923 嘉永5～大正12 江戸</p>	<p>明治・大正期のジャーナリスト・政治家。明治3年日本発の月刊新聞『横浜毎日新聞』が創刊されると、主筆として民権論を鼓吹し、官界に転じた。明治15年立憲改進黨の結成に参画し、幹部として自由民権運動を指導。著書『開国始末』『条約改正論』を著して、文名を高めた。星亨弾劾・シーメンス事件暴露・普通選挙即行などの議会演説は有名であり、嶋田シャベ郎とあだ名されたほどの雄弁家であった。</p> <p>展示書簡:明治23年8月28日付 小生今日之決心は此儘にて立憲自由党成立ち、改進黨も存在せば、小生は独立して双立に関係なく、又双方に関係ある身となり、随意之進退を為す方、一身并友人にも利益ありと相考へ申候。議院内之聯合を計画するに力を用るんと相考へ居り候。</p>
<p>寺家村 逸雅 1通</p>	<p>1831～1895 天保2～明治28 江戸</p>	<p>明治11年『有喜世新聞』を創刊、その発行所三益社の社長となる。この新聞は明治16年に『開花新聞』、明治17年に『改進黨新聞』、更に『開花新聞』『有喜世新聞』と旧題名に戻り、社主の地位を子逸雄に譲った後もその実権は自ら握っていた。</p> <p>展示書簡:明治20年7月20日付 (前略) 来八月一日ハ弊社改進黨新聞四改稱節ニ相當仕候二付江東中村樓二於テ祝宴相催シ露酒呈上仕度就テハ甚暑之砌足勞ニハ候得共同日午後正五時迄ニ御光臨被成下度此段御案内申上候 京橋区南鞘町六番地三益社社長 寺家村逸雅</p>
<p>箕浦 勝人 3通</p>	<p>1854～1929 安政1～昭和4 大分県</p>	<p>明治・大正期の新聞人・政治家。慶応義塾卒。『郵便報知新聞』の記者をしつつ、福沢諭吉の『家庭叢談』の編集を手伝う。明治12年からは宮城県立師範学校校長などもつとめる。明治27年に『郵便報知新聞』が『報知新聞』と改題した際、社長に就任し、大正2年まで在職。その後、言論界のために尽くした。政治界では明治15年改進黨に入ってから、終始一貫大隈系政治家として誠実を一貫した人物である。</p> <p>展示書簡:大正( )年7月20日付 木本氏を紹介する書簡</p>
<p>蘇峰を取りまく言論人・新聞人</p>		
<p>秋山 定輔 1通</p>	<p>1868～1950 明治1～昭和25 岡山県</p>	<p>明治・大正期の政治家。明治26年大井憲太郎らと大日本協会の機関紙『二六新報』を創刊し、社長となる。1年余りで中絶するが、明治33年再刊し、大衆新聞として発展する。日露戦争のとき「露探」(ロシアのスパイ)の嫌疑をうけ、議員を辞職。明治38年には日露講和条約反対の日比谷焼討事件に関係する。以後辛亥革命期には宮崎滔天、孫文らと親交を重ね、大陸問題で政界の黒幕的存在として活躍。</p> <p>展示書簡:昭和15年・16年の年賀状</p>

<p>安達 謙蔵 (号・漢城) 23通</p>	<p>1864～1948 元治1～昭和23 熊本県</p>	<p>明治・大正・昭和期の政治家。佐々友房に認められて国権論の指導を受け、日清戦争に『九州日日新聞』記者として従軍。朝鮮で『朝鮮時報』『漢城新報』(後の『京城日報』)を発刊。昭和7年には中野正剛らとファッショの政綱を掲げる国民同盟を結成して委員長に就任。政界を引退後は、横浜に八聖殿を建てて国民精神修養を唱導した。</p> <p>展示書簡:( )年1月6日付 托手 丸山幹治君</p> <p>京城日報主筆丸山幹治君は多年大阪朝日、大正日日、読売新聞におり、尊台と御同業者なのに未だお目にかかったことがないので、ご紹介いたします。丸山君の筆力は新聞上にてご承知の通りです(要約)</p>
<p>阿部 真之介 1通</p>	<p>1884～1964 明治17～昭和39 群馬県</p>	<p>大正・昭和期のジャーナリスト・評論家。『満州日日新聞』『東京日日新聞』などを経て、毎日新聞社に入り、昭和13年取締役となる。『中央公論』や『サンデー 毎日』に人物評論などを掲載、毒舌で知られた。蘇峰は阿部にかなり辛つな人物評価をされたが、それに対して蘇峰は「なかなかやるわい」と返し、度量の大きなところを見せたという。</p> <p>展示書簡:昭和( )年6月29日付 切手なし 「東京日日新聞社」便箋と封筒使用</p> <p>拙著に対し望外の御高評を賜わり感謝に堪えません。小生の短所を衝かれしあたり誠に愉快に拝読仕り候。ほんの上つらを撫ぜた程度ながら流石は御手練骨身に徹してこたえ申候。(中略)これを言葉通りの痛快と申すべきか(中略)とにかく御眼力敬服の外御座なく候。御礼のしるしと申す程のものには無之候へ共、果物少々お目にかかけ候。御笑味賜はらば幸甚。</p>
<p>池辺 三山 (本名・吉太郎) 9通</p>	<p>1865～1912 慶応1～明治45 熊本県</p>	<p>明治期のジャーナリスト。明治21年東海散士(柴四郎)と共に雑誌『経世評論』の編集にあたり、明治25年旧藩主細川護良に従ってフランスに留学。日清戦争時に鉄崑崙の名で「巴里通信」を新聞『日本』に掲載。明治29年『大阪朝日新聞』に入り、翌年『東京朝日新聞』主筆になった。夏目漱石を朝日新聞に入社させたのは、三山の力が大きかった。また明治41年には二葉亭四迷を露都特派員にした。陸羯南、徳富蘇峰とともに明治30年代の代表的記者といわれる。書家としても有名である。</p> <p>展示書簡:明治( )年7月23日付 切手なし</p> <p>拝啓 石河幹明君招請会本日午後五時半より日本倶楽部二て行はれ候筈 肝腎の老台二御通知漏れと相成居候様二存候 粗漏の罪御ゆるし可被下候 御繰合せ御来光奉希候</p>
<p>岩永 裕吉 2通</p>	<p>1883～1939 明治16～昭和14 東京</p>	<p>昭和期の実業家。衛生行政創立者の長与専斎の4男。兄は医学者の長与又郎、弟は作家の善郎。明治44年満鉄大連本社に入社。大正6年満鉄を退社し鉄道院総裁後藤新平の秘書官となる。退官し渡米。帰国後の大正9年『岩永通信』を発刊した。その後国際通信社専務取締役、日本新聞連合社専務理事などをつとめ、昭和11年同盟通信社の初代社長となる。</p> <p>展示書簡:昭和( )年5月16日付</p> <p>尊著静思余録御自署の上御惠贈を辱ふ致候事若輩の豚児にとり一代之面目にして且至上之奨励に有之。親としての満悦不過之御懇情感銘に不堪奉存候。今夕帰宅の上早速本人へ御厚志を伝へ、反覆拝読致候様申聞可申候。何れ本人より改めて御礼申上べく候共不取敢 小生より乍略儀書中を以て御礼申述度如斯御座候</p>
<p>緒方 竹虎 15通</p>	<p>1888～1956 明治21～昭和31 山形県</p>	<p>昭和期の政治家。朝日新聞社に入社し、大正14年編集局長、昭和3年には取締役。昭和9年『東京朝日新聞』主筆。昭和18年副社長のとき退社。昭和19年小磯内閣の國務相兼情報局総裁に就任し、戦時下の言論統制にあたった。昭和29年吉田総裁辞任後自由党総裁に就任。昭和30年保守合同後、自民党総裁と目されていたが急逝した。中野正剛の親友。</p> <p>展示書簡:昭和18年12月10日付 朝日新聞東京本社の封筒使用。</p> <p>中野正剛の碑についての内容</p>

<p>小川 芋銭 (本名・茂吉) 3通</p>	<p>1868～1938 明治1～昭和13 東京</p>	<p>明治・大正・昭和期の日本画家。21歳のとき尾崎行雄の推挙により、『朝野新聞』の客員となり、同紙に帝国議会スケッチ・漫画をのせ初めて芋銭と号した。明治36年『平民新聞』に請われて漫画をおくり、終刊まで描き続けた。大正4年平福百穂・川端龍子の結成した「珊瑚会」会員となる。明治26年以降は郷里の茨城県牛久村に住み、農村風景を俳味のある水彩画や淡彩画で描いた。河童を描くことでも知られ、独自の画境をひらいた。 展示書簡:明治( )年1月1日 年賀状</p>
<p>城戸 元亮 116通</p>	<p>1881～1966 明治14～昭和41 熊本県</p>	<p>『毎日新聞』の留学制度によりドイツ3年間留学、第1次大戦が始まる直前に帰国し、編集畑を歩き、紙面作成の新機軸を提案した。題字下に広告を入れ、「題字下広告」として各社が取り入れた。記事の見出しについていた黒丸を全部削除し、読みやすくした。また外国電報記事の配列を変更し、発信地に従ってまとめていたものを政治・経済・社会の内容によって配列した。これらの改革はその後他の新聞各社も取り入れた。 展示書簡:昭和4年4月21日 大阪毎日新聞社用箋・封筒使用 (前略)昼は旅行、夜は宴会、定めて御疲労の事と存じます。老台といはず、本山翁といはず月並み言紳ではありますが壮者も及ばざる御健康と御活躍振りにつくづく感じさせられました。よろこびに堪えませぬが、同時に自分達若い者がこれではいかぬと考へました。(後略)</p>
<p>清沢 洌 1通</p>	<p>1890～1945 明治23～昭和20 長野県</p>	<p>大正・昭和期の評論家・ジャーナリスト。代表作『暗黒日記』は昭和29年に東洋経済新報社から出版され、昭和19年4月21日の項の「(不敬罪)は我国にいくつもある。1 皇室 2、東条首相 3、軍部 4、徳富蘇峰……これらについては、一切批判は許されない。」という箇所が、研究者、小説家にしばしば引用される。 展示書簡:大正15年12月21日付 拝啓まだ親しく御教へを受けたこともございませんのに、突然お手紙を差し上げます御無礼をお許し下さいまし。小生事、今回、婦人問題に関する文章を纏めまして一冊の本に致しました。題名を「モダン・ガール」と命じたのは、本屋の希望に出たもので、時勢を追うものとして、或は御批難の筋もあろうかと存じます。一部、別封にて御高覧に供へますが、御高評を得ば、これにまさる光栄はございません。自ら御紹介申上ぐるの非礼をお許し下さいますならば、私は中外商業新報に席を置くもので、先生の御高論は、平正愛読して居るものでございます。</p>
<p>桐生 悠々 (本名・政次) 2通</p>	<p>1873～1941 明治6～昭和16 石川県</p>	<p>明治・大正・昭和期のジャーナリスト。官界・実業界を経て、記者生活に入る。『下野新聞』『大阪毎日新聞』『大阪朝日新聞』などを転々としたのち、明治43年『信濃毎日新聞』主筆となる。反戦、反ファシズムの論陣をはり、圧迫をうけて新聞社を退社。名古屋で個人雑誌『他山の石』を発刊。自由主義的立場で軍部に屈せず言論活動をつづけた。 展示書簡:昭和12年1月24日付の葉書(名古屋より) 昭和12年1月23日に解散を主張する陸相と政党内閣が対立し広田内閣が総辞職したことに対する意見(要約)</p>
<p>陸 羯南 (本名・実) 24通</p>	<p>1857～1907 安政4～明治40 青森県</p>	<p>明治時代のジャーナリスト・評論家。東奥義塾で漢学・英学を修め、明治9年司法省法学校に入学したが、藩閥を背景とする校長らと衝突して退学。帰郷して『青森新聞』編集長となるが、反官的記事掲載のため罰金十円に処された。太政官御用掛となって以後、内閣官報局編輯課長となったが退き、明治21年『東京電報』を創刊し、社長兼主筆となる。翌年『東京電報』を改題して『日本』を創刊し、明治39年まで主筆、社長を務める。人格高潔で言論主張に一点の私情も挟まず、国民自由主義を唱え、不撓不屈の筆陣を張った。徳富蘇峰・朝比奈知泉らと共に言論界の代表的存在となった。 展示書簡:明治22年1月4日付 年賀葉書 神田神保町より</p>

<p>黒岩 涙香 (本名・周六) 2通</p>	<p>1862～1920 文久2～大正9 高知県</p>	<p>明治・大正期の批評家・翻訳家。明治16年『同盟改進黨新聞』 17年『日本たいむず』 18年『絵入り自由新聞』、明治22年『都新聞』の主筆となる。明治25年11月、東京で『万朝報』を発刊した。『万朝報』は「よろず重宝」にあやかる。「普通一般の多数民人」に時事を伝える事に重きを置き、1部1銭という破格の廉価に加え「鉄仮面」など涙香の翻訳小説の連載、娯楽記事、スキャンダル暴露も呼び物で、上流階級からは「赤新聞」とさげすまれながらも読者の大きな支持を獲得した。初期には、内村鑑三・幸徳秋水・堺利彦などを記者に擁して社会問題啓蒙に大きな役割を果たした。日露戦争に際しては当初非開戦論を強硬に主張したが、途中から開戦論に転じて幸徳秋水らの退社を招いている。 展示書簡:明治(22)年9月15日付 右田寅彦と連名 今度別冊平家姫小松及び無惨を発刊致させ候為一部差上仕候(後略)</p>
<p>小泉 策太郎 (号・三申) 44通</p>	<p>1872～1937 明治5～昭和12 静岡県</p>	<p>明治・大正・昭和期のジャーナリスト・政治家。『静岡日報』『自由新聞』の記者を経て、『九州新聞』社長などをつとめ、かたわら幸徳秋水、境利彦らとも交遊して、平民社の非戦活動を支援した。大正1年より衆院議員となり、政友会に属し、高橋是清総裁のふところ刀として憲三派連合の成立を斡旋。また西園寺公望とも親しくする。政界引退後は史伝、評論に専念した。 展示書簡:昭和4年1月18日付 国民新聞を去る蘇峰に宛てた書簡 嗚呼の二字無限の意を尽くす(要約)</p>
<p>下村 宏 (号・海南) 36通</p>	<p>1875～1957 明治8～昭和32 和歌山県</p>	<p>大正・昭和期のジャーナリスト・政治家。逓信省郵便局長や台湾総督府民政長官などをへて官途を退く。大正11年から昭和11年副社長で退社するまで、朝日新聞記者として活動。その後衆院議員となり、社会立法協会・体育協会・カナモジ会・日本放送協会各会長を歴任。鈴木貫太郎内閣の国務相兼情報局総裁として「和平派」に属して、ポツダム宣言受諾の実現に努力した。 展示書簡:大正12年10月1日付 大阪朝日新聞の封筒使用 今回の震災 小生筆舌にかれこれと上す迄も無之候。震災次て火災、(中略)印刷、修繕、再築アラユル方面二通じ同業者トシテ同病者トシテ直接間接二消息モ承知仕候 東京朝日、大阪朝日 無力候シモノト引キクラブ謹テ御見舞申上候 先生ノ日本史ノ稿本ハ杉村楚人冠氏ヨリ無事ノヨシ傳承 新紙ニテモ事情相タシカメ安堵致事二候 国民新聞社丸焼ニナルトモ本日は正二ヶ月ヲ怪タル当日二候乍畢書申ヲ以テ御見舞モ申上ゲ(中略) 帝国ホテル内仮事務処ニテ</p>
<p>正力 松太郎 35通</p>	<p>1885～1969 明治18～昭和44 富山県</p>	<p>昭和時代の政治家・実業家。敏腕な警察官僚として米騒動、市電争議、関東大震災後の警備などに活躍。大正13年虎ノ門事件の責任を負い退官。後藤新平の世話で読売新聞社社長に就任。『読売新聞』の経営不振を克服した。また読売巨人軍を創設してプロ野球を育成した。敗戦直後に起きた読売争議中にA級戦犯として逮捕された。釈放後、日本テレビ放送を設立、社長に就任する。自民党の衆院議員として科学技術庁長官、原子力委員長、国家公安委員長を歴任する。 展示書簡:昭和19年6月6日付 拝啓国家愈々危急存亡の秋、先生の御健闘に対し吾我も深く恥入申候 数日前、緒方君来社し、先生よりの親書を拝見仕り候て 今更ながらも我等の努力の足らざるを痛感仕候 早速先づ阿部総裁に意見を具申することに決し、本日田中、高石、緒方の諸君と共に訪問致し候処総裁も頗る同感の意を表せられ、総理(東条)にも我等の意のある処を伝ふるが、我等にも直接総理に面談せよとのこと候間 総裁より何等かの指示あるものを愚考仕候 何れ其上第二の手段を講ずる考に候(後略)</p>

<p>杉村 楚人冠 (本名・広太郎) 10通</p>	<p>1872~1945 明治5~昭和20 和歌山県</p>	<p>明治・大正期のジャーナリスト。ユニテリアン自由神学校を卒業後、通訳・翻訳に携わる。『国民新聞』の英文翻訳に従事。仏教会革新のため『新仏教』を発刊。明治36年『東京朝日新聞』に入社し、イギリスに特派される。帰国後、外国新聞社に学び、はじめて調査部を創設。記事審査部の設置や縮刷版の刊行など新聞事業の発展に尽力した。軽妙清新な文章の名文家として知られる。著書『大英遊記』『弱者の為に』 展示書簡:昭和7年12月23日付 朝日新聞社用箋使用 拝啓 突然妙な事を申し上げますが前年末禅堂用の警策を柱かけにいたしておきましたところ観る者いづれも名案とほめられるのに心驕りここにその一を贈呈しようという野心を起こしました。元より今更を必要とする賢台に非ざる事は萬々承知いたして居りますが故円覚老漢の墨蹟に多少の御興味を引きもせずやと存じて兎に角持たせ上げます 若しこんなものと思し召されましたら誰かに御やり下さるとも又ハ御焼きすて下さるとも御随意に願います。</p>
<p>田口 卯吉 (号・鼎軒) 12通</p>	<p>1855~1906 安政2~明治38 江戸</p>	<p>明治時代の経済学者・法学博士。大蔵省に入り、明治7年紙幣寮に出仕。明治10年から明治15年まで『日本開花小史』を自費出版。近代におけるに日本文明史のさきがけと称され、新しい歴史観を示した。明治12年永年の念願であった経済専門誌『東京経済雑誌』を創刊。イギリスの『エコノミスト』を範とし、自由主義経済の立場から保護貿易論や政府の経済政策を批判した。『大日本人名辞書』『国史大系』を編纂刊行した。「日本のアダムスミス」「明治の新井白石」ともいわれる。実業家としては、明治23年に南島商會を組織。鉄道経営では明治20年両毛鉄道会社社長、明治21年小田急電気鉄道取締役などもつとめる。蘇峰の『将来之日本』は明治19年に田口卯吉の経済雑誌社から出版された。博士会の推薦により、民間初の法学博士の学位を授与された。著書『自由交易日本経済論』明治女学校の創立者木村鑑子は姉にあたる。 展示書簡:明治20年3月16日付 (10通ある書簡のうち最初の手紙。) 拝啓陳ば山田武甫君御出京之由。何処に御滞留に候や。御承知に候はゞ御通知被下度候也 忽々頓首</p>
<p>田原 禎次郎 (号・天南) 3通</p>	<p>1863~1923 文久3~大正12 山形県</p>	<p>明治・大正期のジャーナリスト。独逸協会学校で法律、文学を学んだ。台湾民政長官後藤新平に招かれて『台湾日日新聞』の主筆となる。田原が海外で収集した蔵書は広範膨大で、死後後藤新平と東京市が全部購入する運びとなっていたが、関東大震災で全て希有に帰した。著書『露国の暗黒面』『露国皇帝の内幕』は後藤新平の口利きで蘇峰の民友社から、出版された。 展示書簡:明治44年3月3日付 絵葉書 ハンブルグより 謹啓小生去月二四日より北西独逸の小旅行相試みゲッチェンゲン、カッセル、ハンノーヴァー、プレーメンを経て昨日ハンブルグに到着明日伯林に帰着の筈ニ御坐候途上の所見雲烟過眼何等の得る処無之候 草々</p>
<p>鳥居 素川 (本名・赫雄) 1通</p>	<p>1867~1928 慶応3~昭和3 熊本県</p>	<p>明治・大正期のジャーナリスト。日清貿易研究社(上海)に入ったが、明治23年陸羯南を知り、日本社に入り日清戦争に記者として従軍。明治30年池辺三山の推薦で大阪朝日新聞社に入る。大正初年の憲政擁護運動を支持し、編集局長として健筆を振るうが、大正7年米騒動の際の筆禍事件(白虹事件)では長谷川如是閑、大山都夫らとともに退社。大正8年雑誌『我等』を発行、同年『大正日日新聞』を創刊したが、1年たらずで出資者間の意見の一致を欠き廃刊となった。 展示書簡:大正9年12月 毎日の中嶋君を以て御伝言被下御厚情奉深謝 柄になき事を為し一敗地に塗れ 啞然黙笑致し候 唯青山あり臥するに只一などと負惜しみを申居候</p>

<p>馬場 恒吾 32通</p>	<p>1875～1956 明治8～昭和31 岡山県</p>	<p>大正・昭和期のジャーナリスト・政治家。「Japan Times」に入社後、渡米し、ニューヨークで英文雑誌「Oriental Review」の編集長をつとめる。大正2年帰国し、「Japan Times」に戻り、編集長となる。その後、『国民新聞』の外報部長、編集局長、政治部長、理事などを歴任。その間パリ講和会議に特派員として随行。大正13年退社。社会大衆党の顧問として、普選・無産運動に参加し、新聞・雑誌などにリベラルな論陣をはる。昭和20年正力松太郎がA級戦犯として拘留された後をうけ、読売新聞社社長に就任、読売争議の弾圧にあった。</p> <p>展示書簡：昭和19年9月3日付</p> <p>朝日新聞にて「呑敵の気魄」を拝読、今更ながら先生の気魄に感動せしめられ候 未だ第2回目を見ざれども然らば目下の日本に何人が此気魄を有するものなるか それをして国政を担任せしめる途ありやといふ問題になると頓と行き詰り候 前欧州大戦のとき、老記者クレマンソーが出た如く或は時艱を救ふべく先生を煩はす方法はなきものなるか(中略)今日の一文拝見して颯爽たる昔日のお姿を偲び候(後略)</p>
<p>真溪 涙骨 (別号・瑞峰) 162通</p>	<p>1869～1956 明治2～昭和31 福井県</p>	<p>明治2年福井県敦賀の浄土真宗本願寺派の寺院に生まれる。明治18年、京都の普通教校(現龍谷大学)に学ぶ。後に博多の浄土真宗本願寺派万行寺の七里恒順に師事。明治30年、超宗派の宗教思想新聞『教学報知』を28歳で創刊。明治35年、報道範囲を宗教界内外の諸分野に広げて『中外日報』と改題。以後、昭和31年に他界するまでの60年間、宗教・思想界全般にわたる論評を紙上に展開する。日々綴った「編輯日誌」からの抜粋を集録した『人生日録』『人生断層』『人間』などの著書が生前に出版された。</p> <p>展示書簡：大正11年1月25日付 玉稿一篇に対する礼状</p>
<p>光永 星郎 (号・八火) 31通</p>	<p>1866～1945 慶応2～昭和20 熊本県</p>	<p>明治・大正期の実業家。明治23年『大阪毎日新聞』に入社し、新聞畑を歩む。明治34年日本広告会社を設立し社長に就任。明治39年通信事業も兼業して日本電報通信社(現・電通)を創立し、通信事業と広告代理業の発展に尽した。</p> <p>展示書簡：昭和9年7月28日付</p> <p>招待の件は来月三日に取極め致し候に付 御光臨の榮を得度切願奉候。米国記者団招待の件も色々の曲折ありて多少の困難に出来申候も宛に角万難を排し(中略)御安慮の榮を得度候。</p>
<p>村山 龍平 3通</p>	<p>1850～1933 嘉永3～昭和8 三重県</p>	<p>明治・大正期の新聞経営者。明治12年大阪で『朝日新聞』創業に際し、社主。明治14年上野理一との共同経営に改め、社長となる。新聞小説・社説・論説をのせ改良を加えた。明治21年星亨の『めざまし新聞』を買収し『東京朝日新聞』と改題して創刊し、東京進出をした。ニュース本位の新聞に脱皮し、日清戦争を契機に、発行部数を伸ばし、さらに夏目漱石の連載小説で評判となる。明治22年『朝日新聞』を『大阪朝日新聞』と改題。明治41年東西朝日を合併し、上野と交代で社長に就任。大正7年米騒動関係記事の筆禍事件で右翼の浪人会に襲われ社長を一時退く。大正8年株式会社となって以後は没するまで社長に在任した。第1～3回衆議院議員に当選。晩年は勅選貴族院議員。</p> <p>展示書簡：明治( )年3月18日付 切手無し 当選への祝詞に対する礼状</p>
<p>望月 小太郎 13通</p>	<p>1865～1927 元治2～昭和2 山梨県</p>	<p>明治・大正期の政治家・ジャーナリスト。慶応義塾法科に入学。在学中警察制度取調への命をうけて、英国に留学。ロンドンにおいて、『日英実業雑誌』を発行、日英両国民に互いの実業界に関する知識を与える事につとめた。著書『世界に於ける明治天皇』上・下</p> <p>展示書簡：明治42年5月22日付 英文通信社の封筒使用</p> <p>外国新聞雑誌中より、本邦に関する外交財政通商の評論を蒐集した本を謹呈いたしますので、御高評をお願いしたい(要約)</p>



<p>本山 彦一 (号・松陰) 25通</p>	<p>1853～1932 嘉永6～昭和7 熊本県</p>	<p>明治・大正期の新聞経営者。福沢諭吉に師事。明治15年『大阪新報』に入社。『時事新報』で会計局長。『大阪日報』の経営をまかされた。同社は明治21年に『大阪毎日新聞』と改題され、翌年相談役に就任。明治36年には社長に就任、経済重視の新聞として再出発した。その後、『東京日日新聞』を手中に収め、東京進出を果たした。本山は昭和4年国民新聞社を退社した蘇峰を『大阪毎日新聞』『東京日日新聞』の社賓として迎えた。</p> <p>展示書簡:昭和6年4月16日付 大阪毎日新聞社封筒使用 山陽書簡跋御丁寧に御認め下さり御厚志有難く謝し奉り候 大に価値を増し一段と読者の崇敬之念を増さしめ(後略)</p>
<p>山本 実彦 18通</p>	<p>1885～1952 明治18～昭和27 鹿児島県</p>	<p>大正・昭和期の出版事業家・政治家。『門司新報』主筆、『やまと新聞』記者、東京毎日新聞社社長をへて、大正8年改造社をおこし、総合雑誌『改造』を創刊した。『改造』は第一次世界大戦直後の社会改造思潮のなかで生まれ、『中央公論』と並んで自由主義、社会主義の世論を率いた。</p> <p>展示書簡:昭和19年6月13日付 謹啓 今回私不徳の結果改造を廃刊シ改造社長ヲ退任セナクテハナラヌコトニナリマシタ 誠ニ済マヌコトデス コレハ私が部下ノ或事件ニ対シ 道義的責任ヲ取ツタノダト御承知下サイ 而シ私は元気デアリマス 皇国ノ為ニ精根ヲ傾ケテ皇恩ニ報ジタイノデアリマス 前後策ガツキマシタラ一時間鎌倉ニ休養シマスカ 北支ニ行キマスカドチラカニ決定シヨウト思イマス 事件ノ真相ハ皆目私モ不明ナノデス ソレデ責任ヲトツタノデス 全ク狐ニツママレタヨウナ御報告デス 御笑下サイ 御高誼ヲ永ラク受ケテ此始未デアリマス(後略)</p>
<p>蘇峰が創刊した『国民新聞』の社員たち</p>		
<p>阿部 充家 (号・無佛) (初期の書簡は 神山と名乗る) 142通</p>	<p>1862～1936 文久2～昭和11 熊本県</p>	<p>明治・大正期のジャーナリスト。同志社に学んだ。蘇峰が熊本の大江村に開いた大江義塾の教員を務める。明治11年熊本新聞社長となる。明治24年上京して、民友社に入り、蘇峰に従って国民新聞社の発展に生涯を通して尽力し、副社長も務める。日韓併合後、大正4年から一時『京城日報』の経営を任せられ、社長となる。</p> <p>展示書簡:明治(21)年8月19日付 大江逸(蘇峰の別号)宛 内容は多岐に渡る長文の書簡</p>
<p>高浜 虚子 (本名・清) 17通</p>	<p>1874～1959 明治7～昭和34 愛媛県</p>	<p>明治・大正・昭和期の俳人・小説家。正岡子規に師事。明治29年『国民新聞』の俳句撰者となり、明治31年松山で柳原極堂が出していた『ホトトギス』を、経営難から子規の願いで東京で虚子が発行することとなった。明治41年に国民新聞社に入り、『国民文学欄』という文芸欄を創設し、担当した。明治43年に『国民新聞』を退社し、『ホトトギス』に専心することになった。</p> <p>展示書簡:明治43年1月1日付 年賀の挨拶</p>
<p>竹越 与三郎 (号・三叉) 46通</p>	<p>1865～1950 慶応1～昭和25 埼玉県</p>	<p>明治・大正・昭和期の歴史家・政治家。『大阪公論』『時事新報』『国民新聞』などの記者をつとめる。大阪公論に在社中、蘇峰に書簡を送り、政党の動静、『東雲新聞』および大阪公論社のことなどを報告している。蘇峰は『国民新聞』を創刊するに際し、竹越を大阪から呼びもどした。竹越は『国民新聞』の社説を担当し、何度か発行停止を受けた。三叉の妻・竹代は日本初の女性新聞記者として『国民新聞』に寄稿した。竹代は取材の際は丸帯をしめ、正装をして出かけたという。</p> <p>展示書簡:明治20年6月27日付 国民之友寄書之事に付御申越有之候や、右は初年之原稿に不都合あるかと存じ再度之原稿さし上候事故、小生に於ては何れにても何とか方を付けて被下ばそれにてよろしく候が、右之内何れかを六号文字にてよろしく候間、来月之分へ是非是非御掲載之榮を得たし、と申す訳は小生近日論文を集めて出版仕り度(後略)</p>

<p>人見 一太郎 号 呑牛 64通</p>	<p>1865～1924 慶応1～大正13 熊本県</p>	<p>明治・大正期の新聞記者・評論家・実業家。大江義塾時代からの同志。民友社の創設に尽力。蘇峰主宰の「文学会」に出席。民友社から出版された十二文豪『ユーゴー』を担当。明治30年民友社を退社し、台湾総督府の後藤新平の後押しで、製糖業に従事した。 展示書簡:明治19年9月14日付 上京した蘇峰に大江義塾廃止後の様子を知らせる内容</p>
<p>深井 英五 107通</p>	<p>1871～1945 明治4～昭和20 群馬県</p>	<p>大正・昭和期の財界人・官僚。同志社卒。国民新聞社、民友社に勤務。明治29年蘇峰と共に欧米漫遊の旅に出る。明治33年松方正義蔵相の秘書官となり、翌年日銀調査局調査役をふり出しに、営業局長や理事を経て、昭和10年日銀総裁に就任。その間バリ講和会議やワシントン軍縮会議、ロンドン国際経済会議などに列席。日銀退職後、昭和13年枢密顧問官の職を務めた。深井の『枢密院重要議事覚書』は、昭和史研究の貴重な資料となっている。 展示書簡:明治27年11月(15)日 広島より 小生は殆ど何故に貴下の知遇を受くること此の如く厚きかを解する能はず候 小生は一たび貴下の知遇を感じてより全身を挙げて驥尾の一毛たらんと決心いたし居り候 貴下に知らるゝに到つて始めて真に知遇なるものゝ意味を解し申候 以来今日に到るまで変ることなく将来もまた変わることはなかる可く候。昨日の御書面に積極的なれ、攻勢を取れ、主地を占めよとの御訓言、殊に意味の新たなるを覚え候。前には言を解して意を解せず、今は活ける意味を解したるを覚え候。着々実行を試み可申候。</p>
<p>松原 岩五郎 号 二十三階堂 3通</p>	<p>1866～1935 慶応2～昭和10 鳥取県</p>	<p>明治・大正期のジャーナリスト。日本で初のルポライター。幸田露伴の紹介で国民新聞社に入社。さまざまなルポルタージュを新聞紙上に発表。『国民新聞』に明治25年11月11日以降連載されて、好評を博した。貧民窟ルポ『最暗黒之東京』は民友社から刊行された。これは、明治憲法発布後、日清戦争前の、最下層の東京の人々の生活をルポルタージュしたものであり、明治中期の東京の貧困層の姿を描いたものである。挿絵は、久保田金僮が担当した。 展示書簡:明治(23)年(10)月25日付 小生は松原岩五郎と申無骨物に候 将来の日本、新日本の青年などの為に頭脳を支配される一人に候 其当時より拝顔致し度く存じ居り候得ば、未熟の寒生一物を持たずして名士に逢ふ事恥かしく存じ、今まで差控へ居候 (中略)昨年冬二葉亭四迷先生に面会し話したるに、いかさま思当る事無之候得ば何分都会の景況に暗き身の上なれば志しあつて其運び就かず 其後幸田露伴子に逢ふて話し大に賛成を得たれども同じく異様なものなれば世上の評判も如何やと差控、段々工夫をして此度露伴の尽力にて好色二人男と申小説、春陽堂より発兌仕候 是は決して好色ものには無之、されども艶あるものに無之は当世の評判なさゆえと本屋の圧制旁々斯くは名付候表と中とは雲泥の相違に候 あらまはは画飾の事、町人辛苦の様、且又小作人は此后直に出版致す覚悟に候処より小作人と大都会との関係、彼等現今生活の模様候 其れに就は此読者を新日本青年の中に求めたき願ひ、(中略)近日の中是非拝顔に参上致し度き願ひなれば其節委細申上候。(後略)</p>
<p>山路 愛山 本名 弥吉 24通</p>	<p>1864～1917 元治1～大正6 東京</p>	<p>明治時代の史論家・評論家。東京英和学校。キリスト教の伝導に従ひ、雑誌『護教』の主筆となる。明治25年『国民新聞』記者となる。民友社に入り、史論・文学論を発表した。明治32年『信濃毎日新聞』の主筆。明治36年個人雑誌『独立評論』を創刊し、同誌上で「余は何故に帝國主義の信者たる乎」などを発表。日露戦争では主戦論を唱えた。史論や富豪論・政治家論を『国民雑誌』『中央公論』『太陽』などに発表した。 展示書簡:明治29年10月11日付(徳富・深井英五宛) 蘇峰先生足下 人間は何時迄も梁山泊の頭領たり、子分たりにて止むべからず(中略)せめては一個の市民となり(中略)僕は足下の助言を請ふて、民友社よりのれんを分けてもらひ 別に一身上を起したく思ふなり いつまでも君の厄介になるは僕の忍びざる所なり(後略)</p>

『国民新聞』の挿絵画家たち		
池部 鈞 (山下) 9通	1886～1969 明治19～昭和44 東京	『京城日報』『国民新聞』の漫画記者。俳優池部良の父。 展示書簡:明治44年8月2日付 手描きの絵入り葉書 今日嚴妃葬儀見物に出掛申候 白い衣服の中に赤や黄や黒がチラチラいたし 美しく感じ申候 小生七日当地出発 上京の予定にて先生にお目に可かるも近き内と楽しみ居り候
久保田 金僊 (本名・吉太郎) 20通	1875～1954 明治8～昭和29 京都	久保田米僊の子。『国民新聞』の記者。日清・日露両戦争に従軍。 展示書簡:( ) ( )年12月17日付 軍用葉書使用従軍先より 美しい色使いの絵入り葉書
久保田 米僊 25通	1852～1906 嘉永5～明治39 京都	明治期の日本画家。京都画壇刷新の先駆者。フランス留学後、明治23年『国民新聞』の創刊にあたり蘇峰の招きに応じ、上京して民友社に入り『国民新聞』に挿画を描いた。月給は70円(当時蘆花は11円) 日清戦争が勃発すると画報記者として従軍し、絵入り通信は好評を博した。明治30年、岡倉天心のすすめで石川県工芸学校の教職についたが、在職1年で眼疾のため退職。明治33年失明。 展示書簡:明治(28)年6月19日付 従軍章の意匠は已に御送付申上候筈 一応御取調被下度候 尚御落筆に相成不申候はゞ金仙え御たゞし被下度候 京都及滋賀の風光も少々御送付申上候也 尚追々差上可申候(別紙 従軍章の3つのデザイン絵入り)
平福 百穂 (本名・貞蔵) 47通	1877～1933 明治10～昭和8 秋田県	大正・昭和初期の日本画家。雑誌や新聞に挿絵を執筆。軽快・洒脱な筆致を生かした時事的なスケッチは紙面に生彩を添えた。明治40年12月草村松雄の斡旋により国民新聞社に入社。議会スケッチや写真修正などを担当し、以後22年間国民新聞社に籍を置く。蘇峰は平福のことを出会った時から尊敬をこめて、「平福先生」と呼び、旅行を度々共にした。旅先で百穂が描いた絵には蘇峰が賛を入れた。 展示書簡:明治41年8月2日 「諸名家腕力競」 第一部 (11人の顔の絵入り葉書) 書画・田沢静雲 文・三島中州 画・三宅蘭崖 文・亀谷省軒 画・服部波山 文・島田重禮 画・猪瀬東寧 英字・福澤諭吉 書・成瀬大城 書・小此木観海 画・奥原晴湖
新聞紙上を飾った人気作家たち		
巖谷 小波 (本名・季雄) 18通	1870～1933 明治3～昭和8 東京	明治・大正期の小説家・童話作家。尾崎紅葉らの『硯友社』同人として小説を書き、新進作家として知られたが、明治24年創作童話『こがね丸』を発表し、童話作家として新生面を開く。明治27年博文館に入社。『少年世界』の主筆となり、毎号少年文学・おとぎ話を執筆し、人気を集めた。また古典御伽噺を集大成した『日本昔話』や『日本御伽噺』を出版。『世界お伽文庫』の出版にも尽力した。蘇峰主宰の「文学会」に出席。 展示書簡:明治33年11月23日・明治34年12月11日 ベルリンよりの絵葉書
尾崎 紅葉 (本名・徳太郎) 5通	1867～1903 慶応3～明治36 東京	明治時代の小説家。山田美妙らと硯友社を結成。近代日本文学史上最初の同人雑誌となった、回覧雑誌『我楽多文庫』を出す。明治21年からは一般に発売された。この『我楽多文庫』の発展が紅葉らに職業作家になる決心をさせた。明治22年大学在学のまま『読売新聞』に入社し、文芸欄を担当。明治23年に大学を中退し、作家生活に入る。明治25年から35年『金色夜叉』など主要作のほとんどを『読売新聞』に発表した。 展示書簡:明治25年1月1日 年賀状 明治22年12月2日 尾崎徳太郎の名前で転居通知 牛込北町四十一番地に転居致し候

<p>菊池 寛 9通</p>	<p>1888～1948 明治21～昭和23 香川県</p>	<p>大正・昭和期の小説家・劇作家。一高同級の芥川龍之介・久米正雄らと大正5年第4次『新思潮』を創刊。同誌に発表した『父帰る』などの戯曲は、当時世評に上らず、『時事新報』の記者となる。その後『恩讐の彼方』などの小説で一躍流行作家となった。大正12年雑誌『文芸春秋』を創刊。出版事業の進展につれ創作活動から離れるが、新人発掘などに功績を残した。 展示書簡:昭和4年1月17日付 先生今回のこと多く云ふに堪えずたゞ敢然として処決せられたるは先生の尚老いざるを示し、むしろ会心の事と存じ 先生のためにいさゝか意を強うするものに御座候 蘇峰は昭和4年国民新聞を退社した際に開かれた慰労会の席上、菊池からもらった書簡を紹介し、「五十万円の株券よりもありがたかった」と心を語った。</p>
<p>国木田 独歩 (本名・哲夫) 3通</p>	<p>1871～1908 明治4～明治41 千葉県</p>	<p>明治時代の詩人・小説家。蘇峰が明治20年に創刊した雑誌『国民之友』の編集に従事。『国民新聞』の日清戦争従軍記者となり、弟の民友社社員収二に宛てた形で書いた『愛弟通信』で文名をあげる。蘇峰には佐伯での教師の件や佐々城信子との恋愛・結婚・離婚の件で世話になる。 展示書簡:明治41年5月6日 はがき 茅ヶ崎南湖院より 昨日は又洪水先生御見舞下され有難く存候 87才の御老体にして実に壮夫の態あり 来年末の御祝まで小生も如何にしても生き度き者と存候。</p>
<p>幸田 露伴 (本名・成行 別号・蝸牛庵) 12通</p>	<p>1867～1947 慶応3～昭和22 江戸</p>	<p>明治・大正・昭和期の小説家・随筆家。尾崎紅葉とならぶ小説家として広く知られる。作品は理想主義的ロマンチズムが示され、紅葉とは対象をなした。蘇峰らの呼びかけで始まった「文学会」に出席。『国民新聞』に『一口剣』を発表した。 展示書簡:明治24年6月6日付 御書拝見仕り候 然し何を書き申すべく候や 小説とありては近頃短篇ものゝ趣向相憎無之一寸差因り候が 随筆様のものか乃至は正月読売新聞に附録として小生のいだしし浮世談義体の小説とも議論ともつかず つまり小説の皮かぶり候ものにて「外道かゞみ」と題名いたすべきつもの案じは有之 何とか御腹蔵なく仰せ越され候迄にて御答可仕存じ居候</p>
<p>末広 鉄腸 (本名・重恭) 11通</p>	<p>1849～1896 嘉永2～明治29 愛媛県</p>	<p>明治時代の政治家・小説家。上京して大蔵省に入るが言論人として立つことを志して退官。明治8年『曙新聞』に入社。のち『朝野新聞』に転じて活躍。成島柳北とともに筆禍で入獄。明治14年自由党に入って活動、民権派の論客として知られる。明治19年政治小説『雪中梅』を発表して、大衆的人気を博した。明治21年外遊し、翌年帰国。『東京公論』『大同新聞』と転じ、のち新聞『国会』を主宰した。「文学会」にも出席。 展示書簡:明治( )年6月22日付 拝啓昨夜も失敬致し候 委託され候朝鮮処分に関する調査之件、成る可く至急に御協議致し度存候 今夜は無抛用事有之明日なれば何時にても差支無之 場処は東京ホテルにて可然存候 御都合為御調被下候得ば仕合之至りに存候也</p>
<p>徳富 蘆花 (本名・健次郎) 150通</p>	<p>1868～1927 明治1～昭和2 熊本県</p>	<p>明治・大正期の小説家。蘇峰の弟。明治22年兄蘇峰の民友社に入り、翻訳、人物史伝、短編小説などを発表。明治31年末から『国民新聞』に連載された『不如帰』が単行本として出版され、好評を博す。『自然と人生』『思出の記』を出版。長編『黒潮』を『国民新聞』に連載。自作を無断削除されたことから、民友社との関係を絶つことを決意。明治36年『黒潮・第1篇』出版に際し、兄蘇峰への告別の辞を巻頭に掲げ世評をよんだ。聖地巡礼の途中で、トルストイを訪問。トルストイの生活を手本として、北多摩に移住した。大逆事件では一高で『謀反論』と題する講演を行った。この時の一校の校長は新渡戸稲造であった。絶交状態の蘇峰とは、蘆花臨終の際に和解した。「文学会」に出席。 展示書簡:明治42年5月26日 華蔵の滝の絵葉書。</p>

<p>夏目 漱石 1通</p>	<p>1867～1916 慶応3～大正5 江戸</p>	<p>明治・大正期の小説家。早くから漢詩文をよくしたが、正岡子規を知って俳句を学ぶ。『ホトトギス』などに評論文などを発表。明治38年には『吾輩は猫である』を連載した。明治40年に教師を辞して、池辺三山の招聘により朝日新聞社に入り、作家生活を始めた。朝日新聞入社の際には次のように心境を述べている。</p> <p>新聞社の方では教師としてかせぐ事を禁じられた。其代り米塩の資に窮せぬ位の給料をくれる。食ってさえ行かれれば何を苦しんでザットのイットのを振り廻す必要が であろう。やめるとなと云ってもやめて仕舞う。休めた翌日から急に脊中が軽くなって、肺臓に未曾有の多量な空気が溜まって来た。学校をやめてから、京都へ遊びに行った。其地で故旧と会して、野に山に寺に社に、いずれも教場よりは愉快であった。鶯は身を逆まにして初音を張る。余は心を空にして四年来の塵を肺の奥から吐き出した。是も新聞屋になった御蔭である。人生意気に感ずとか何とか云う。変わり物の余を変わり物に適する様な境遇に置いてくれた朝日新聞の為に、変わり物として出来得る限りを尽すは余の嬉しき義務である。</p> <p>展示書簡は蘇峰から『横川和尚百人一首』の複製本を寄贈されたことに対する礼状。 展示書簡:明治42年2月9日付</p> <p>拝啓 御刊行の横川和尚撰五山百人一首 二百部のうち第百五十号先日高浜虚子の手より正に落掌 難有御礼申上候 日常御多忙の折 道般の風流に閑日月を弄せられ候 御余裕 羨敷限に候 正是雪村老漢の鑊湯炉炭起清風の一句に相当するものと存候 頃日机辺に集積する名所の書巻は悉く生存競争の臭味有之 久振にて此好事の雅集に接し 陋懐頓に一碗の苦茗を喫したるの感有之 たゞ俗用蠅集 静かに緬邈の趣を致す能はず 玉腕和尚の軒前修竹緑娑婆 玉立三竿不用多好是満山風雨夜 虚心相对亦他無の一首を挙げて感謝の辞に代へ申候 草々 頓首 夏目金之助</p>
<p>宮崎 湖処子 (本名・八百言) 5通</p>	<p>1864～1922 元治1～大正11 福岡県</p>	<p>明治時代の詩人・小説家・牧師。明治21年10月から11月にかけて『東京経済雑誌』に『国民之友及び日本人』を6回にわたり連載。明治23年に国民新聞社に入社。詩文集『帰省』を出版して注目された。詩では島崎藤村以前の抒情詩人の第一人者といわれる。評論では「硯友社」批判とワーズワースの最初の紹介者として知られる。明治19年に洗礼を受け、教会牧師となる。晩年は伝道生活を送った。</p> <p>展示書簡:明治29年12月3日</p> <p>(前略)御通信一回も見遣すことなく拝読仕居候 何はさておき矚目直ちに目より筆に移さるゝ御敏速に歎服仕候 妄言御免し下され候はゞ、スエズ運河航行の一章真に絶品と奉存候 舟月下を下りゆく有様今猶ほ眼底に残り居申候 其外凡て即景即情御摘発相成筆力、健次郎氏とも相ひ語り候 山陽の手腕にも勝るべしと 之を思へば自然に対して理窟を附るが如きは二流以下の事にて、形状真写の伝ふる筆力こそ真個の詩人の能筆と愈歎息仕候 (中略)嘗て小説には未だ成功せずとの小生への御評言バタと適中仕候て、小生自身も今は小説を書きたる事を悔ひ候 小生は到底散文の詩人たることを火を見るごとく発見仕候 是に依つて出来るだけ奮励仕覚悟仕候 之に就ても四五年前懇々と此事に就て御教訓を辱ふしたる事を思ひ起し候 小生は実に善き朋友を有せる事に就て天に謝し候と共に、朋友の言を用ふる事の常に晩きことを漸悔仕候 是より后小生の務むべき処は従諫如流の一事にありと存候 益御示教を加へられんことを奉訴候(後略)</p>
<p>村上 浪六 (本名・信) 5通</p>	<p>1865～1944 慶応1～昭和19 大阪</p>	<p>明治時代の小説家。諸種の職業を経た後、報知新聞社に校正係として入社した。明治24年『報知新聞』編集長森田思軒の勧めで書いた処女作「三日月」が好評を博し一躍人気作家となる。大衆作家として長く人気を持った</p> <p>展示書簡:( ) ( )年7月18日付</p> <p>拝啓 大阪の書肆青木嵩山堂主人 吉田松陰獄中自筆の一冊もの秘蔵いたし候 兼てより先生二一応御鑑定をいのり仕候処 幸ひ今度上京仕候間 御繁忙中恐入候へとも御面会の榮を賜はらば小生まで面目を施し候 右願上候 早々 なみろく</p>

<p>森 鷗外 (本名・林太郎) 13通</p>	<p>1862～1922 文久2～大正11 島根県</p>	<p>明治・大正期の軍医・小説家・評論家。雑誌『国民之友』の寄書家。明治22年訳詩集「於母影」を『国民之友』に発表。雑誌『しがらみ草紙』を創刊。明治23年には『国民之友』に『舞姫』を発表する。明治42年創刊された雑誌『スバル』に『キタ・セクスアリス』を書き、明治43年に創刊された『三田文学』に『妄想』を発表した。蘇峰らが主宰した「文学会」に出席。 展示書簡:明治2( )年9月29日付 拝啓一昨日早朝差出シ候批評家ノ秘訣ナル一篇、余リツマラヌ者ニ候ヘトモイサ、カ解嘲ノ意味モ有之候ヒシニ、今ニ御掲載無之、果シテ御没書ニ相成候モノニヤ 右乍御手数御報煩シ度候也。早々不乙。</p>
<p>矢野 龍溪 (本名・文雄) 83通</p>	<p>1850～1931 嘉永3～昭和6 大分県</p>	<p>明治時代の政治家・小説家。慶応義塾卒。福沢諭吉の推薦で大隈重信の下で官吏になり、明治14年大隈とともに改進黨の結成に参画。『報知新聞』に入り、明治16年ギリシア史に材をとった政治小説『経国美談』を著し、大反響をもたらす、明治18年新聞事業視察のため渡欧して翌年帰国。明治23年『報知新聞』掲載の空想的冒険小説『浮城物語』も好評を得た。国会開設後政界を去り、その後は社会問題に関心を示し、明治35年小説『新社会』を発表し再び注目を集める。『大阪毎日新聞』に入り、隨筆を発表。蘇峰主宰の「文学会」にも出席。矢野は夕食に友人を招くことを好み、招待した人によって国風論や史談論、政治論など話題を変え、サロンのな場を提供した。この夕食に蘇峰も度々招かれ、この会の面白さが蘇峰が「文学会」を主宰する発想の発端となったようだ。 展示書簡:明治(22)年11月7日付 (前略) 猶此度は国民之友停止之御不幸有之、驚入候。乍去ら、益々御声価を増し可申と、却而拝慶致候。…今より一層之御繁昌之兆とこそ奉存候。(後略)</p>

外国人ジャーナリストたち		
<p>Chiral Valantine 1通</p>	<p>1852～1929 嘉永5～昭和4 英国</p>	<p>イギリスの新聞記者。外務省書記をつとめた後、『タイムズ』紙の記者になる。1899～1912年外交部主任として、インドその他アジアの各地に特派され、日本にも立ち寄り、日英同盟を支持。イギリス植民地主義擁護の代表的論客として筆をふるう。『タイムズ』がノースクリップの手に移ると社を辞めた。蘇峰は日露戦争後チロルが来日した際に会見した。(蘇峰著『老記者叢話』参照) 展示書簡:明治43年2月8日付</p>
<p>Capper 21通</p>		<p>イギリス人ジャーナリスト。『タイムズ』の副編集長。蘇峰はアーネスト・サトーが英国大使として東京に居る時に、大隈重信の紹介でキャパーに会った。キャパー夫妻と蘇峰の家族は家庭的な付き合いもあったようだ。(蘇峰著『老記者叢話』参照)。外国人で蘇峰に書簡を送った人のうち、一番通数が多い人物。 展示書簡:明治43年4月5日付</p>
<p>G. E. Morrison 1通</p>	<p>1862～1920 文久2～大正9 オーストラリア</p>	<p>イギリスのジャーナリスト。エディンバラ大学で学び、医者となる。1895～1912年まで『ロンドン・タイムズ』北京駐在員。その後中華民国總統政府の政治顧問として活躍。義和団籠城部隊に参加し負傷。日露戦争当時、日英同盟を踏まえて日本鼠兎の記事を送り、ポーツマス講和会議まで出向いて、成行きを見守った。在中期間に収集した極東関係の図書(モリソン文庫)は膨大な量にのぼり、岩崎久弥によって買いとられ、東洋文庫に収められた。 展示書簡:大正5年8月19日付 (帝国ホテルの便箋・封筒使用) 蘇峰が進呈した本に対する礼状。</p>



蘇峰が明治20年10月に創刊した『国民之友』の表紙

- (1) 第10号 (2) ペンを持った女神が地球儀に足を置いている表紙(原田直次郎画) (3) 天岩戸の天照大神(原田直次郎画)  
 (4) 明治29年に創刊された『国民之友』の英文の部。深井英五が編集した。

蘇峰が収集していた江戸時代の終わりにから明治のはじめにかけての新聞

**バタビア新聞(文久新聞) 第一~十二号 (合本) 刊行年 文久2年**

日本最初の新聞。文久2(1862)年1月に発刊された『官板バタビア新聞』。蕃書調所の編集による国別方式の抄訳。江戸書肆老皂館・万屋兵四郎が発売した。

**海外新聞別集 下巻 刊行年 文久2年**

ニューヨーク新聞の南北戦争記事、オランダ紙掲載の幕府遣欧使節記事を集めた翻訳抄録の新聞。

**江湖新聞 第一集 刊行年 慶応4年 出版地 江戸 定価八分**

福地源一郎が糸野伝平、廣岡幸助、西田伝助を協力者として創刊した新聞。新政府の怒りをかう論説で新聞は発禁処分になった。

**横浜新報 もしほ草 第一編 九十三番 刊行年 第1~第4編(慶応4年) 出版地 横浜 定価一匁**

アメリカ人E.バン・リードが発行者、岸田吟香がこれを助け、英文原稿を邦訳した。

**公私雑報 第三号 刊行年 慶応4年 出版地 東京 定価一匁**

橋爪貫一が創刊した。体裁内容とも、中外新聞の姉妹編。

**内外新聞 第一号 刊行年 慶応4年 出版地 江戸**

柳河春三が発刊した新聞で、海外事情と国内事情を報道するという趣旨の題号。

**内外新報 第二十一号 刊行年 慶応4年 出版地 江戸 定価八分**

橋爪貫一らによって発行された佐幕派新聞。50号で廃刊。

**遠近新聞 第一号 刊行年 慶応4年 出版地 江戸 定価一匁**

辻理之助らが刊行した佐幕派新聞。30号まで発行され、維新政府により一旦禁止された後、明治2年3月再刊したが、3号で終刊。

**日日新聞 第一輯 刊行年 慶応4年 定価一匁**

橋爪貫一らが発刊した、日本における邦字日刊紙の祖とされる新聞。題号の「日日」は、毎日の刊行の意図を表しているが、実行されたのは5月上旬の一時期のみであった。

**そよふく風 第二号 刊行年 慶応4年 定価一匁**

開成所の洋学者たちによる新聞。11号で廃刊。佐幕派新聞で、官軍東征に伴う各地の戦報が中心。

**官許 市政日誌 第一号 刊行年 慶応4年夏**

**新聞雑誌 刊行年 明治4年 出版地 東京 定価二匁**

民心統合を図るため、新聞局開設を考えていた参議・木戸孝允が山形篤蔵らにより日新堂から発行させた。

**官許 新聞事実 刊行年 明治8年**

宮崎松代・和田千枝・高野静子 作成

参考文献:「コンサイス人名辞典」(三省堂)・佐々木隆著「日本の近代14「メディアと権力」(中央公論新社)・「五十人の新聞人」(電通)・宮武外骨著「明治大正言論資料20「明治新聞雑誌関係者略伝」(みすず書房)・ビジュアルワイド明治時代館(小学館)・「近代日本総年表」(岩波書店)・ニュースパークだより(日本新聞博物館)・徳富蘇峰著「老記者叢話」「新聞記者と新聞」(民友社)・「三代言論人」(時事通信社)・高野静子著「蘇峰とその時代」(中央公論社)「続蘇峰とその時代」(財)徳富蘇峰記念塩崎財団)・「徳富蘇峰宛書簡目録」(財)徳富蘇峰記念塩崎財団)・徳富蘇峰関係文書(山川出版)

# 蘇峰堂便り

父は配達されたばかりの朝刊を大きく広げ、静かに黙読する。私はその父の横にそつと近づき、なるべく邪魔にならないように、社会面左上あたりに掲載されているサザエさんの4コマ漫画を見て「へへへ」と笑う。こんな風にして一日が始まった。新聞を踏んだり跨いだりすると嚴重に注意を受けたし、学校でも家庭でも、大人からは「新聞をきちんと読みなさい」と繰り返して指導された。新聞の持つ力を子供ながらに身をもって感じていた。

日本に新聞が登場したのは、ちょうど蘇峰が生まれた頃と一致する。鎖国という縛りが溶け、近代に足を踏み入れた日本には、様々な情報が必要だった。広く世界の様子を知らするために、かなりのタイムラグがあっても、翻訳物の新聞が熱心に回し読みされたそうだ。言論という手段が、武力に勝る道具となり得ることが明らかになった時代である。その時代の潮流の中で、青年蘇峰が新聞というメディアに強い関心を持ったのは、当然であつたかもしれない。そして新聞記者は社会の代表者であり、批評家であり、指導者であるべきだ、という蘇峰の考えは終生変わることはなかった。

蘇峰がよく使う言葉に「新聞は明日の歴史で、歴史は昨日の新聞」というフレーズがある。新聞人が信念を持って取材し、報道されたニュースは、時間の流れにのってそのまま歴史を形作る一断面となる。今回の展示テーマの骨格・ジャーナリズムという世界を形作っていった日本を代表する新聞人たちは、自分の中に揺るがぬ中心軸を持ち、変らぬ信念のもと明日の歴史を刻んでいった。彼らは新聞の力を信じる時代のナビゲーターであつた。

宮崎 松代

情報量の多さとそのスピードに、時として潰されそうな思いにならないだろうか。また、情報の真実についても、所有者权益を澄ませてみたくならぬだろうか。

世界中で毎日起こる出来事を、私たちはメディアを通して知る。情報を送る側と受け取る側の双方が成熟していなければ、正しく情報を認識することはできないだろう。

「嗚呼、国民之友生まれたり」と題した蘇峰の雑誌『国民之友』は、明治20年2月15日、第一号が発刊された。三年後の明治23年2月には『国民新聞』が創刊され、発行部数は七千部であつた。その『国民新聞』は紙面で政府批判を繰返し、度々発行停止処分を受けた。「民友社」を起し、「平民主義」の主張を掲げた明治20年の蘇峰は24歳であつた。いつの時代も青年たちは、熱い思いを内包し発散させる。時にはそれは政治闘争となり、既成の文化への抵抗となる。明治の若き言論人たちは、国家への思いをマグマのように膨らませ、論壇の雄となつた。

「看よく眼を開いて我が新日本を見よ」と蘇峰が国民の覚醒を喚起した時代から百二十年。ジャーナリズムの状況は大きく変化した。しかし、その使命は常に変わらず「真実の追求」にあるのではないか。創刊百二十年を迎えた某新聞社は「ジャーナリズム宣言」として、「言葉のチカラを信じることを訴えている。ピクトル・ユゴーも「筆の力は剣の力に優る」と名言し、「言葉には世界を変える力がある」と人間を勇気づけている。暴力を暴力で抑えるのではなく、言葉によって世界の平和を追求する。それこそが、圧制をのり越えて民衆が手にした「言論の自由」であり「真実を知ることではないのか。明治の言論人の目指したのも同じではなかつただらうか。」

和田 千枝

## 編集後記

・高野静子編著「往復書簡」後藤新一・徳富蘇峰1895〜1929」が藤原書店から出版されました。お互いの生き方を尊敬しあっていた二人の書簡が写真版で掲載されています。

・今年は何年より梅の開花が遅れました。  
(高野静子・宮崎松代・和田千枝)

**お詫びと訂正**  
平成十七年度徳富蘇峰記念館展示目録(22)の11ページ、成瀬仁蔵の解説文中の二箇所の記事に間違いがありました。

誤	正
雑誌『女子教育』を創刊し。 生涯独身を通した。	『女子教育』を著し、 この部分は削除

ここに訂正して、訂正させていただきます。  
(学芸員 高野静子)

平成十八年三月二十四日発行

編集 高野 静子  
発行者 竹 越 起 一

発行所 (財)徳富蘇峰記念塩崎財団  
〒359-0333 神奈川県中郡二宮町二宮六〇五  
TEL 〇四六三二七一一〇二六六  
FAX 〇四六三二七一〇六七七  
ホームページ  
<http://www2.ocn.ne.jp/~tsoho/>  
E-mail: tsoho@peach.ocn.ne.jp